

王であるキリスト
世界青年の日

福音朗読 ヨハネ 18・33b-37

2024.11.24 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、イエス様がエルサレムの総督官邸でピラトと対面する、そういう場面が朗読されました。この後、やがてピラトはイエス様を十字架に付ける、その決断をする。イエス様が十字架の死へ向かって行く、それに繋がっていく場面なわけですが、イエス様はエルサレムに来なければ十字架にかかるということもなかったのではないかと思います。

ガリラヤにとどまっていた、そして弟子たちや自分を信じる人たちと過ごしているならば、あるいはガリラヤから更にその国の外に出るならばより安全だったかもしれません。でもイエス様がエルサレムに向かったのは、そのようにして自分が国の外にあるいはガリラヤにとどまってしまうことで取り残されていく人々のこと、神の民が神様のみこころを忘れた社会を作ってしまったがゆえにどこからも助けられることがないような取り残された人々一人ひとりのこと、イエス様が会った人たちのことを思い浮かべて、そういう人たちを残しておけないし、そして神様に呼ばれたイスラエルの民が神様のみこころをみんなで思い出して回心してくれるように、ご自分の安全ということよりも、人々が回心することを通して助け合うことによって、人間の尊厳が回復されていく人たちがいるっていうことを、やっぱり見ないふりはできなかったわけです。そういう意味では、人々への愛ゆえにイエス様はエルサレムに行き、そしてそれが十字架へとイエス様を追いやるというか、導いていくことになってしまうわけです。

愛ゆえにイエス様は十字架へと進んだと考えるなら、人々が愛するならばすべてがうまくいくんだという楽観的なことを聖書や教会の信仰が言ってるわけではないということになります。

愛するならば、誰かのことを考えるならば、それによって十字架へと至る。自分の人生の可能性を失うかもしれないし、場合によっては——もっと簡単な場合でも——、誰かのために自分自身の一部分を犠牲にする、あるいは人生全体を

失う可能性もある。そういうことを常に持っているのが、誰か他の人を愛するということなんだ、と。

だけどそれを避けて自分の安全を確保するというところだけを人生の中心にして良いのか、そしてそれが本当に人類にとって、また一人ひとりの人生にとってまことの幸せなのか、と問いかけているのが聖書の信仰だし、イエス様ご自身の生き方なのではないかと思います。

今日わたしたちは「王であるキリスト」の祭日をお祝いしていますけども、それは、わたしたちが従っていくべきは、自分自身が損をするあるいは人生を失う可能性がありながらも、でも他の人のことを忘れることができなかつた、そういうイエス様の生き方、その心こそ人間の中に一番最後に大切にしていくものなのではないかということだと思います。それはわたしたちの中にもあるし、心の奥のイエス様の呼びかけに答えていくということこそが本当の人間の歩むべき道なんだということを、「王であるキリスト」っていう荘厳な言い方ですけど、表現しているのではないかと思います。

今日はカトリック教会の中では「王であるキリスト」の祭日であると同時に、「世界青年の日」でもあるんです——ワールドユースデー。それは何年かに一度世界のどっかで行われるイベントのことではなくて、毎年——何年か前までは「枝の主日」がそれだったんですけども、数年前から「王であるキリスト」の祭日が「世界青年の日」であるというふうに教皇様に移したんですが——、教皇様は[若者たちに向けたメッセージ](#)を出されます。今年のテーマは「主に望みをおく人は、歩いても疲れぬ」というイザヤの預言から採られたそういうテーマでメッセージを出されてるんです。

わたしたちの人生はいろんなことがあって、そして躓^{つまづ}きもあるし疲れもある。だけどそれは当たり前のことなんだ、と。歩けなくなるときもある。だけど本当に力をいただくのは、力の源はイエス様に従うことなんだと教皇様はおっしゃいます。それはキリスト教徒になるとか、そういう表面的なことではなくて、イエスのように、自分が損をしても、でも他の誰かのことを考える、そういう自分たちの中にある心を大切にしていくということに他ならないわけです。そうするならば、いろんな人生の歩みを歩んでも力が失われることはないんだ、と。逆に言うならば、自分が損をしないように自分はどれだけ満足できるかという中

にとどまるならば、どれだけ満足的なものを得たとしても、ずっといつも空虚で疲れているということなんではないかと思えます。

わたしたちが心の中で問いかけてくるイエス様の呼びかけに従い、本当の生きる力をいただきながら互いに助け合うように、イエス様は絶えずわたしたちの心の奥から呼んでおられるし、そして教会はともに助け合いながらその呼びかけに答えていきましょうと、わたしたちを励ましているのではないかと思えます。

今日、教皇様はそのメッセージの中で、人生の旅路に疲れなために一人ひとりに与えられる糧はご聖体なんだということもおっしゃいます。それは、そのミサの中でいただくパンに特別な力があってなんか薬のように効くってということじゃないです。ご聖体を一人ひとりの中に受け取るということは、イエス様と同じように、自分が損をするかもしれないけど愛することを恐れなくてというその思いを^{はぐく}んでいくという決意でもあるし、そのためだったら神様はいくらでも助けてくださるという信頼の行為でもあるということなんだと思えます。

今日わたしたちが「王であるキリスト」の祭日、一年の典礼の最後の日付けにあたり、それぞれの歩みを思い起こしながら、でも絶えずともにいてくださるキリスト、イエス様の呼びかけに答える思いを新たにしておき、そのために神様が、イエス様が助けてくださる、その信頼のうちに信仰生活を送る思いを新たにしたいと思えます。

参照：2024年第39回「世界青年の日」教皇メッセージ（2024.11.24）

「主に望みをおく人は、歩いても疲れぬ」（イザヤ 40・31 参照）

<https://www.cbcj.catholic.jp/2024/11/01/30908/>

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>